

論文

# ストーリーの結末が幼児の想像力に及ぼす影響

## —ハッピーエンド絵本とバッドエンド絵本を用いて—

The effect of narrative ending on children's imagination: Comparing happy ending and sad ending

玉瀬 友美 (高知大学教育学部)<sup>1</sup>

石田 翔真 (市川三郷町立市川東小学校)<sup>2</sup>

TAMASE Yumi<sup>1</sup> and ISHIDA Shoma<sup>2</sup>

<sup>1</sup> Faculty of Education, Kochi University

<sup>2</sup> Ichikawasango Town Ichikawahigashi Elementary School

### ABSTRACT

The purpose of this study was to examine the effect of the difference of the story ending on the imagination of kindergarteners. Six-year-old kindergarten children were divided into a happy-end group(N=23) and a bad-end group(N=23). The happy-end group heard a picture book with happy ending, and the bad-end group heard a picture book with sad ending. Then, both groups' children were given the question asking story content and the question that predict the subsequent development of the story. The children of the bad-end group had many opinions to the questions asking story content, and there was a diversity in the content of the utterance. In addition, the children of the bad-end group had a large number of new words not used in the picture book for the prediction question, and there was a diversity in the subsequent development of the story. These results showed that listening to a story with a bad ending enhances the imagination of kindergarten children.

## I. 問題の所在

幼児期に出会う絵本は、幼児にとってさまざまな刺激を与えてくれる。幼児は、目の前に展開する絵本の場面を見つめ、自分が持っている知識を総動員しながら絵本に描かれている世界を自分なりに理解しようとする。そして、絵本を通して、現実世界にあるものごとを知っていくとともに、幼児がもつ想像の世界も広がっていくのである。絵本の読み聞かせ経験は、言葉の獲得を促進するだけでなく、子どもの想像力を刺激し、豊かなイメージの世界をつくる足掛かりの一つとなるものであるといえよう(Scarborough & Dobrich, 1994; Bus et al., 1995)。絵本と想像性について、佐々木(1998)は、「子どもは、自分が経験したことや、知識が、思わぬ方向で並べられていたり、あっと驚くような新しい姿をもってあらわれてくると見ると、ワクワクするような緊張と楽しさを感じます。そして、このような大人の側が与えてくれる空想の世界の広がり、子どもの想像力を強く刺激するといえましょう。」と述べている。

絵本と幼児の想像力との関係について、中澤・中道・大澤・針谷(2005)の研究がある。中澤ら(2005)は、5歳児を対象に、ストーリーは同一であるが「登場人物がかわいく、色調が明るい」絵が描かれた絵本と「登場人物はかわいくない、色調が暗く、どこか神秘的で不気味なイメージをもつ」絵が描かれた絵本、そしてその中間のイメージの絵が描かれた絵本の読み聞かせを行い、幼児の物語理解と想像力に及ぼす影響を検討している。その結果、読み聞かせ終了後に続きのお話を作らせる作話課題において、「かわいくイメージ」の絵が描かれた絵本を読み聞かせられた幼児の得点が低かったことから、絵本の絵が幼児の想像力に影響すること、そして、幼児の想像力が「かわいくイメージ」の絵によって抑制されることを明らかにしている。

中澤ら(2005)の研究では、絵本の絵に注目しているが、絵本は絵と文から成り立つものであることから、ストーリーの内容も幼児の想像力に影響を及ぼすことが予想される。しかし、ストーリーの内容が幼児の想像力に及ぼす影響を実証的に検討している研究は見当たらない。本研究では、絵本のストーリーが幼児の想像力に及ぼす影響を検討する。

柳田(2004)は「人は誰しも人生の中で、愛する家族の誰かや親友の死にあたり、家族同様に暮らしてきたペットに死なれたり、あるいは失恋や進学の実験など、さまざまな喪失体験をする。しかし、これまでは絵本というジャンルで、死別の悲しみをかかえてどう生きるかという重いテーマは、避けられる傾向にあった。」と述べている。また、工藤(2006)は、保育者の絵本理解に関して考察し、感情情緒の育成という点からは、当然喜怒哀楽全てを体験することが望ましく、喜怒哀楽の「哀」を避けて通るべきではないと述べている。

このように、絵本のストーリーには、喜びを感じる内容だけでなく、悲しみを感じる内容がある。このような2つのタイプの結末の在り方によって幼児の想像性に及ぼす影響は異なるのであろうか。

幼児の想像力が「かわいく、明るい」絵によって抑制される(中澤ら, 2005) のであれば、ストーリーの内容に関しても、ハッピーエンドをもつ絵本が幼児の想像力を抑制することが予想される。

本研究では、ハッピーエンド絵本とバッドエンド絵本を用いて、ストーリーの結末の違いが幼児の想像力に及ぼす影響について検討する。

## II. 研究の方法

### 対象児

高知県内のA幼稚園年長2クラスに在籍する46名の幼児(平均年齢6歳1か月:範囲5歳7か月~6歳7か月)が対象となった。そのうち一方のクラスに在籍する幼児23名(男児8名、女児15名)を、ハッピーエンド絵本を読み聞かせられるハッピーエンド群とし、他方のクラスに在籍する幼児23名(男児10名、女児13名)を、バッドエンド絵本を読み聞かせられるバッドエンド群とした。

### 材料

1998年に講談社から発行された「ミロとまほうのいし」(作:マールカス・フィスター 訳:谷川俊太郎)を材料とした。この絵本はストーリーの第7場面以降はページが上下に分かれ、上のページは「しあわせなおわり」、下のページは「かなしいおわり」のそれぞれの結末をもつ構造となっている。この絵本を2冊用いて、第7場面以降の「かなしいおわり」の部分を切り取り「しあわせなおわり」だけをもつハッピーエンド絵本と、第7場面以降の「しあわせなおわり」の部分を切り取り「かなしいおわり」だけをもつバッドエンド絵本をそれぞれ作成した。「ミロとまほうのいし」の各場面の概要はTable1に示す。

### 手続き

調査はすべて第2著者が行った。対象児が普段使用しているそれぞれの保育室で降園前の時間帯に絵本の読み聞かせを行った。

「今日はみんなにある絵本を読み聞かせしたいなと思って来ました。みんなこの絵本は知ってる？」と話して絵本を提示し、「これはあるネズミさんのお話です。どんなお話かな？じゃあ読ませよう。」と話した後、集団での読み聞かせを行った。

読み聞かせをした後に、「この絵本読んでどう思った？」(内容振り返り質問)、「これからネズミさんたちどうなると思う？」(事後予想質問)とたずねた。対象児の行動は保育室に設置された2台のビデオカメラで録画した。

対象児からの発言には基本的にオウム返しや頷きで返答し、質問に対しては、その答えがストーリーに明示されている場合にはその質問に答え、そうでない場合には、「どうだろうね？」と答えるにとどめた。なお、教育的配慮から、バッドエンド群の幼児には、後日、ハッピーエンド版の絵本を読み聞かせた。

Table1 『ミロとまほうのいし』（マーカス・フィスター 作、谷川俊太郎 訳、講談社）各場面の概要

場面	ハッピーエンド	バッドエンド
1	島にはミロと仲間のねずみたちが住んでいた。みんなは島が大好きだった。	
2	夏のあいだミロと仲間たちは食べ物あつめてたいへんだった。でも時には平たい石で水切りをして遊んだ。	
3	初めての冬の嵐がくると、ねずみたちは一日中暗いじとじとしたほらあなでまろくなり、暖かい明るい春を夢みるのだった。	
4	嵐のすぎたある日、ミロは食べ物を探していると、深い岩の裂け目に、ふしぎな光る石を見つけた。ミロはそれをひっぱりだし、もってかえた。	
5	ミロはびっくりした。石は明るく輝き、それはほんわかと暖かいのだ。明るい光に誘われて、すぐ仲間がやってきた。	
6	みんな自分の石をほしがって、ミロにみつけた所へ連れて行けとせがんだ。賢い年寄りのバルタザールが言った。「石はみな島のものだ。島のものを取ったら恩返しをしなければならん。」	
7	「バルタザールの言うとおりでよ。」とミロは言い、海岸へ降りて行って、光る石と同じくらいの光る石を探した。	他のねずみたちはバルタザールの言うことをきかず、トンネルをめちやくちやに掘り、小さな石は投げ捨てて、大きな光る石をほしがった。
8	ミロは座り込んで石にきれいなおひさまをきざみつけた。みんなを山へつれていき、光る石をみつけた秘密の裂け目にきざんだ石をおいた。	ねずみたちは光る石をほらあなにひきずっていった。みんな欲が深くなり、疑い深くなった。
9	仲間たちは掘りはじめた。そして山のトンネルからみんなひとつずつ光る石を取り、大切にうちへもってかえた。	ねずみたちは、もっと魔法の石を手に入れようとトンネルに這いこみ、夜も昼も掘りつづけた。
10	ミロのしたように、みんな海岸で普通の石を見つけ、それにかざりをつけ、光る石をみつけた裂け目においた。	ねずみたちは欲に溺れてしまった。深く掘ったので、山はすっかりがらんどろになってしまった。
11	それからは、風の強い冬もみんな平気になり、明るく暖かいほらあなで過ごした。	そして突然、山はものすごい音をたてて崩れ落ちた！島のほとんどは海に沈んだ。
12	毎年ねずみたちは、冬の始まりを祝った。バルタザールのほらあなに集まって踊ったり歌ったりした。	残ったただ1つのほらあなでミロとバルタザールがうずくまりふるえた。ミロは島に捧げる石をきざむ仕事に戻った。

### 倫理的配慮

園児の絵本読み聞かせ場面のビデオ撮影について、当該幼稚園の園長に、研究目的、研究方法、研究内容、研究対象者の個人情報の保護、研究協力の任意性と撤回の自由についての説明を行い、承諾を得た上で調査が行われた。また、当該幼稚園は教育・研究園であり、プライバシーの十分な保護の上で園児の行動の記録や園児が制作したものなどを学会等において発表することについて、保護者からの文書による承諾を事前に得ていることを確認した。

## III. 結果

### 1. 内容振り返り質問

まず、内容振り返り質問に対して発言した人数についてみると、ハッピーエンド群において発言したのは4名、発言しなかったのは19名、バッドエンド群において発言したのは21名、発言しなかったのは2名であった。物語の結末により発言する人数に差異が生じ

るか否かを明らかにするために $\chi^2$ 検定を行ったところ、人数の偏りが有意であった ( $\chi^2(1) = 25.32, p < 0.01$ )。

Table2 は、内容振り返り質問に対する発言回数の群ごとの平均と標準偏差を示したものである。単語数や品詞に関わりなく、幼児が発言をやめるまでを発言数1回としてカウントした。ハッピーエンド群とバッドエンド群の差が統計的に有意かを確かめるためにt検定(両側)を行ったところ、ハッピーエンド群とバッドエンド群の発言回数の平均に有意差がみられたことから ( $t(44) = -3.90, p = .001$ )、ハッピーエンド絵本を読み聞かせた場合よりもバッドエンド絵本を読み聞かせた方が幼児の発言が多いといえる。

次に、内容振り返り質問に対する発言内容を、「仲間たちが沈んだってことは死んだってことやきちよっと悲しかった」のような”ネガティブな気持ちの表出”、「面白かった」のような”ポジティブな気持ちの表出”、「ネズミたちが一番下まで掘ったから山がじゃぶーんてなって水が入ってきた」のような”物語あるいは場面の説明”、

Table2 内容振り返り質問に対する発言回数の平均と標準偏差

	ハッピーエンド群	バッドエンド群
対象者数	23	23
平均	0.22	1.26
標準偏差	0.51	1.07

「僕はね、お爺さんが言ったお返しをやらなかったからこんなことになったと思うがって」のような“物語あるいは場面の解釈”、「魔法の石で私はそっこう思ったんだけどさ、ミロが魔法の石で魔法を唱えて、魔法がかなったら島が元通りになって仲間達と一緒に暮らしたと思う」のような“事後の予想”、「死んだが（死んだの）？」のような“質問”、「死んだで。最後二人しかおらんかった」のような“他児の質問への応答”の7つのカテゴリに分けた（評定者一致率は91.2%）。Table3は、内容振り返り質問に関するそれぞれの内容ごとの発言数を示す。バッドエンド群では、7つのすべてのカテゴリについての発言がみられるのに対して、ハッピーエンド群では、“ポジティブな気持ちの表出”と“物語あるいは場面の解釈”に関する発言のみがみられた。

## 2. 事後予想質問

事後予想質問に対して発言した人数についてみると、ハッピーエンド群において発言したのは3名、発言しなかったのは20名、バッドエンド群において発言したのは12名、発言しなかったのは11名であった。物語の結末により発言する人数に差異が生じるか否かを明らかにするために $\chi^2$ 検定を行ったところ、人数の偏りが有意であった（ $\chi^2(1)=8.01, p<0.01$ ）。

次に、事後予想質問に対する対象者の発言の中から、読み聞かせを行った絵本の本文に書かれていない単語（動詞、形容詞、名詞、副詞）を抽出し新出単語としてカウントした。他の幼児の発言に対する同意や、「わかりません」等、発言内容がストーリーに関する幼児の想像にもとづく発言では無い場合はカウントをしなかった。Table4に、事後予想質問への発言における新出単語数の群ごとの平均と標準偏差を示す。ハッピーエンド群とバッドエンド群の差が統計的に有意かを確かめるために、t検定（両側）を行ったところ、ハッピーエンド群とバッドエンド群が発言した新出単語数の平均

Table3 内容振り返り質問に関する内容ごとの発言数

	ハッピーエンド群	バッドエンド群
ネガティブな気持ちの表出	0	1
ポジティブな気持ちの表出	4	9
物語（場面）の説明	0	2
物語（場面）の解釈	1	5
事後の予想	0	1
質問	0	6
他児の質問への応答	0	5

に有意差がみられた（ $t(44)=-3.75, p=.001$ ）。このことより、ハッピーエンド絵本を読み聞かせした場合よりもバッドエンド絵本を読み聞かせした方が幼児は多くの新出単語を発言していたといえる。

Table4 事後予想質問への発言における新出単語数の平均と標準偏差

	ハッピーエンド群	バッドエンド群
対象者数	23	23
平均	0.04	1.26
標準偏差	0.20	1.51

次に、事後予想質問への発言を、“ハッピーエンド”、“バッドエンド”、“わからない”の3つのカテゴリに分けた（評定者一致率は88.9%）。Table5は、内容振り返り質問に関する内容ごとの発言数を示す。

Table5 事後予想質問に関する内容ごとの発言数

	ハッピーエンド	バッドエンド	わからない
ハッピーエンド群	3	0	0
バッドエンド群	14	0	1

“ハッピーエンド”に分類された発言内容をみると、ハッピーエンド群では、「キラキラなネズミさんになるかもしれない」「ネズミの石が星になると思う」のような、特定の登場人物や物に焦点をあてた発言がみられた。一方、バッドエンド群では、ミロとバルタザールが「島に留まり幸せに暮らす」という内容と、「新しい場所に移動して生きる」という内容の2つのパターンがあった。そして、「新しい場所に移動して生きる」という内容をもつ発言には「泳いで行く」あるいは「ボートで行く」という移動方法に言及した発言、「ネズミがいっぱいいるところ」という「新しい場所」の条件に言及した発言、「いっぱい働く」という「新しい場所」での暮らし方に言及した発言があり、多様なストーリーが作られていた。

また、ハッピーエンド群、バッドエンド群ともに、バッドエンドを予想した発言はみられなかった。

## IV. 考察

本研究では、ハッピーエンド絵本とバッドエンド絵本を用いて、ストーリーの結末が幼児の想像力に及ぼす影響を検討した。

内容振り返り質問については、ハッピーエンド群よりもバッドエンド群の方が幼児の発言が多かった。また、発言の内容をみると、ハッピーエンド群では、「ポジティブな気持ちの表出」と「物語あるいは場面の解釈」のみがみられたのに対して、バッドエンド群の発言の内容には「ネガティブな気持ちの表出」、「ポジティブな気持ちの表出」、「物語あるいは場面の説明」、「物語あるいは場面の解釈」、「事後の予想」、「質問」、「他児の質問への応答」といった多様性がみられたことから、ハッピーエンドよりもバッドエンドをもつ絵本

の読み聞かせの方が幼児の想像力を高めたといえる。

事後予想質問については、発言された新出単語数の平均に有意な群差がみられ、ハッピーエンド群よりもバッドエンド群の方が多くの新出単語を発言していた。また、発言の内容をみると、事後にバッドエンドを予想した幼児はいなかったという点において両群は同様であったが、事後にハッピーエンドを予想した幼児の発言内容には違いがみられた。バッドエンド群では、ハッピーエンド群に比べてより多様な展開をもつ事後ストーリーが作られていたのである。このことから、ハッピーエンドよりもバッドエンドをもつ絵本の読み聞かせの方が幼児の想像力を高めたといえる。

バッドエンド群の幼児において想像力豊かな発言が多くみられた理由の1つとしては、幼児がストーリーの「不完全さ」を埋めようとしたことが考えられる。子どもはしあわせな内容のお話が好きであり（佐々木宏子, 1998）、登場人物の未来を予想するときに「こうありたい」、「こうあってほしい」という願望や期待をそこにこめる（守屋, 1994）。ストーリーの前半を聞いた幼児は、石の力でミロたちは楽しい生活を送るだろうと予想したのではないだろうか。しかし、ミロは「まほうのいし」を見つけたのに、最後は住んでいる島のほとんどが海に沈むという悲しい結果に終わってしまった。幸せに終わらなかったストーリーから感じた不完全感、欠如感を埋めようとして、「ミロが魔法の石で魔法を唱えて、魔法がかなったら島が元通りになって仲間たちと一緒に暮らしたと思う」など、バッドエンド群の幼児はいろいろな展開を想像して、なんとかしてストーリーを幸せに終わらせようとしていたように感じられた。

本研究では、ストーリーの最期の場面で描かれている登場人物の感情をもとに、ハッピーエンドストーリーとバッドエンドストーリーを区別したが、ストーリーの結末だけでストーリー全体の意味が「ハッピー」か「バッド」かが決まるわけではない。何をもちてハッピーエンドストーリーあるいはバッドエンドストーリーとするにかんしては様々な議論があろう。藤本（2010）は、絵本 *The Tale of Peter Rabbit*（『ピーターラビットのおはなし』）を例にあげて、物語の結末の描き方について論じている。主人公ピーターが、畑で盗み食いをして逃げ帰り、最後に具合が悪くなって終わるという物語である。表面的には、悪い結果に終わったようであるが、ピーターは命を落とさなかったばかりでなく、この作品を読む子どもたちの心には、ピーターの冒険の楽しさと恐ろしさが、あたかも自分が経験したかのように、心の奥底に確実に残ると述べている。

本研究におけるバッドエンドストーリーを聞いた後に、その後に幸せな結末を予想した幼児にとっては、悲しみではなく幸せな余韻が残る読み聞かせ経験となったと考えられる。一見、幸せでないストーリーであっても、幼児がそこからどのように想像を広げてイメージの世界を楽しむのかは、読み聞かせを共に聞く仲間や保育者との関わり方によってもさまざまであろう。幼児の想像力を高める上でハッピーエンドのお話だけが幼児に適しているとはいえないこと、悲しみや寂しさといった感情を味わう絵本体験が幼児の想像力を高めることが、本研究から示された。

また、バッドエンド群がハッピーエンド群よりも想像力が高かつ

た理由として、本研究における読み聞かせが集団で行われたこともあげられよう。内容振り返り質問では、幼児からの質問やそれに対する他児からの応答がみられた。このようなやりとりができたのは、集団で読み聞かせを聞くことの心地よさを感じ、自分の気持ちを表現しても受け入れてもらえるという安心感をもっていたからではないだろうか。

幼稚園教育要領における領域「言葉」には、「絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」というねらい及び「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう」という内容が示されている（文部省, 2018）。保育場面での集団読み聞かせにおいては、幼児は保育者の読みを聞いて想像力を働かせるであろう。そして、それだけではなく、同じ場にいる他児のつぶやきや表情や発言から他児がもつイメージを理解したり、他児の表現を刺激として自分のイメージを膨らませたり、それを他児に伝えたりして、想像の世界を広げていく。集団読み聞かせは、保育者が絵本を読み、幼児が読みを聞くという一方通行的な活動ではなく、保育者と幼児、そして幼児同士が相互に関わり合い、イメージを共有しながら、共に絵本を受容していく活動である。それが「先生や友達と心を通わせる」読み聞かせであるといえよう。

## 引用文献

- Bus, A. G., van Ijzendoorn, M. H., & Pellegrini, A. D. (1995). Joint book reading makes for success in learning to read: A meta-analysis on intergenerational transmission of literacy. *Review of Educational Research, 65*, 1-21.
- 藤本朝巳, (2010) 絵本の構成と表現手法：結末の結び方と空間表現. *フェリス学院大学文学部論要* 45, 175-191
- 工藤真由美, (2006) 保育者の絵本理解に関する一考察. *四條学園短期大学紀要* 39, 13-19
- 文部科学省(2018) 幼稚園教育要領
- 守屋慶子 (1994) .子どもとファンタジー 絵本による子どもの「自己」の発見 新曜社
- 中澤潤・中道圭人・大澤紀代子・針谷洋美. (2005) .絵本の絵が幼児の物語理解・想像力に及ぼす影響. *千葉大学教育学部研究紀要* 53, 193-202.
- 佐々木宏子(1998) 増補 絵本と創造性—三歳まえの子どもにとって絵本とは何か— 高文堂出版社
- Scaborough, H. S., & Dobrich, W. (1994). On the efficacy of reading to pre-schoolers. *Developmental Review, 14*, 245-302.
- 柳田邦男, (2004) 『砂漠で見つけた1冊の絵本』 岩波書店

## 付記

本稿は、2018年度に石田翔真が高知大学教育学部に提出した卒業論文を基に、玉瀬友美が再分析、再検討したものである。

